

(二〇一九年度)

### 3 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は19ページ、三問である。)

#### 受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

日本文化のなかで文学と造形美術の役割は重要である。各時代の日本人は、抽象的な思弁哲学のなかでよりも主として具体的な文学作品のなかで、その思想を表現してきた。たとえば『万葉集』は同時代の仏教のどんな理論的著述よりも、奈良時代の人間のもののお考え方をはるかに明瞭にあらわしていたといえるだろう。撰関時代の宮廷文化は、高度に洗練された和歌や物語を生み出したが、独創的な哲学の体系をつくり出しはしなかった。<sup>1</sup>鎌倉仏教は、おそらく徳川時代の儒学の一部と共に、日本史の例外である。しかし法然や道元の宗教哲学は、その後体系として完成されたのではないし、仁齋や徂徠の古学は、その後思想家に大きな影響をあたえたけれども、より抽象的であり包括的な思惟を生み出したのではない。日本の文化の争うべからざる傾向は、抽象的・体系的・理性的な言葉の秩序を建設することよりも、具体的・非体系的・感情的な人生の特殊な場面に即して、言葉を用いることであつたようである。

他方、日本人の感覚的世界は、抽象的な音楽においてよりも、主として造形美術、殊に具体的な工芸的作品に表現された。たとえば撰関時代の芸術家は、仏像彫刻と絵巻物に、そのおどろくべき独創性を發揮していた。しかし声明や雅楽に、日本人の独創がどの程度まで加えられていたかは疑わしい。たしかに室町時代は能の、徳川時代は浄瑠璃の音楽をつくつたが、一度つくり出された音楽の様式のその後の発展は、わずかなものにすぎなかつた。室町時代に水墨画をとり入れ、狩野派を發展させ、一方では南画に到り、他方では大和絵の系統を融合させながら、琳派の絢爛たる開花に及び、遂に浮世絵木版を生んだ。絵画の歴史とはくらべることができないだろう。日本の文化は、ここでも、楽音という人工的な素材の組合せにより構造的な秩序をつくり出すことよりも、日常眼にふれるところの花や松や人物を描き、工芸的な日用品を美的に洗練することに優れていたのである。

文化の中心には文学と美術があつた。おそらく日本文化の全体が、日常生活の現実と密接に係り、遠く地上を離れて形而上学的天空に舞いあがることをきらつたからであろう。<sup>2</sup>このような性質は、地中海の古典時代や西欧の中世の文化の性質とは著

しくちがう。西洋にはやがて近代の観念論にまで発展したところの抽象的で包括的な哲学があり、またやがて近代の器樂的  
世界にまで及ぶだろう多声的音樂があつた。中世の文化の中心は、文學でも、工芸的美術でもなく、宗教哲學であり、その具  
体的表現としての大伽藍である。繪画・彫刻は、その伽藍を飾り、「ミステリー」はその前の広場で演じられ、音樂はその内側に  
鳴り響いていた。同時代の日本では、仏教の盛時にさえも、美術が仏教とばかりではなく、世俗的な文學とむすびつき、音樂  
も宗教的儀式とよりは、劇や世俗的な歌謡の言葉と連なつていた。日本の文學は、少くともある程度まで、西洋の哲學の役割  
を荷い(思想の主要な表現手段)、同時に、西洋の場合とはくらべものにならないほど大きな影響を美術にあたえ、また西洋中  
世の神學が藝術をその僕としたように音樂さえもみずからの僕としていたのである。日本では、文學史が、日本の思想と感受  
性の歴史を、かなりの程度まで、代表する。

もちろん中国では、文學と美術(殊に繪画)との關係が書を介して、しばしば密接不可分であつた。音樂もまた文學から独立  
して西洋でのような器樂的發展を遂げたのではない。そのかぎりでは、日中文化の間に、一方から他方への影響を別にして考  
えても、少くとも表面上の類似がめだつ。中国はすぐれて文學の國であつた。しかし二つの文化が決定的にちがうのは、中国  
的伝統のなかでは、包括的体系への意志が、宋代の朱子學にも典型的なように、徹底していたということである。朱子學的綜  
合は、日本では到底成立するはずがなかつた。ということは、また、徳川時代のはじめに幕府の公式の教學として採用された  
宋學が、一世紀足らずの間に日本化されたことから知られる。日本化の内容は、まさに包括的体系の分解であり、形而上學  
的世界觀の實踐倫理と政治學への還元ということであつた。

中国人は普遍的な原理から出發して具体的な場合に到り、先ず全体をとつて部分を包もうとする。日本人は具体的な場合に  
執してその特殊性を重んじ、部分から始めて全体に到ろうとする。文學が日本文化に重きをなす事情は、中国文化に重きをな  
す所以と同じではない。比喩的にいえば、日本では哲學の役割まで文學が代行し、中国では文學さえも哲學的となつたのであ  
る。

日本で書かれた文學の歴史は、少くとも八世紀までさかのぼる。もっと古い文學は、世界にいくらでもあつたが、これほど

長い歴史に断絶がなく、同じ言語による文学が持続的に発展して今日に及んだ例は、少い。サンスクリットの文学は、今日まで生きのびなかった。今日盛んに行われる西洋語の文学(伊・英・仏・独語文学)は、その起源を文芸復興期(一四、五世紀)前後にさかのぼるにすぎない。ただ中国の古典語による詩文だけが、日本文学よりも長い持続的發展を経験したのである。

7 しかも日本文学の歴史は、長かつたばかりではない。その發展の型に著しい特徴があつた。一時代に有力となつた文学的表現形式は、次の時代にうけつがれ、新しい形式により置換えられるということがなかつた。新旧が交替するのではなく、新が旧につけ加えられる。たとえば抒情詩の主要な形式は、すでに八世紀に三一音綴おんづつの短歌であつた。一七世紀以後もう一つの有力な形式として俳句がつけ加えられ、二〇世紀になつてからはしばしば長い自由詩型が用いられるようになったが、短歌は今日なお日本の抒情詩の主要な形式の一つであることをやめない。もちろん一度行われた形式が、その後ほとんど忘れられた場合もある。奈良時代以前から平安時代にかけて行われた旋頭歌せとうかは、その例である。しかし奈良時代においてさえも、旋頭歌は代表的な形式ではなかつた。徳川時代の知識人たちがしきりに用いた漢詩の諸形式は、今日ほとんど行われていない。しかしそれは外国語による詩作という全く特殊な事情による。新旧の交替よりも旧に新を加えるという發展の型が原則であつて、抒情詩の形式ばかりでなく、またたとえば、室町以後の劇の形式にも、実に鮮やかにあらわれていた。一五世紀以来の能・狂言に一七世紀以来の人形浄瑠璃・歌舞伎が加わり、さらに二〇世紀の大衆演劇や新劇が加わつたのである。そのどれ一つとして、後から来た形式のなかに吸収されて消え去つたものはない。

同じ發展の型は、形式についてばかりでなく、少くともある程度まで、各時代の文化が創りだし、その時代を特徴づけるような一連の美的価値についてもいえるだろう。たとえば撰関時代の「ものあはれ」、鎌倉時代の「幽玄」、室町時代の「わび」または「さび」、徳川時代の「粹」、——このような美の理想は、そのまま時代と共にほろび去つたのではなく、次の時代にうけつがれて、新しい理想と共存した。明治以後最近まで、歌人は「あはれ」を、能役者は「幽玄」を、茶人は「さび」を、芸者は「粹」を貴んできたのである。

このような歴史的發展の型は、当然次のことを意味するだろう。古いものが失われないのであるから、日本文学の全体に統

一性(歴史的一貫性)が著しい。と同時に、新しいものが付加されてゆくから、時代が下れば下るほど、表現形式の、あるいは美的価値の多様性がめだつ。抒情詩・叙事詩・劇・物語・随筆・評論・エッセーのあらゆる形式において生産的であり得た文学は、若干の欧州語の文学を除けば、他に例が少いし、文学・美術にあらわれた価値の多様性という点でも、今日欧米以外には、おそらく日本の場合に比較する例がないだろう。清朝末期までの中国文学と同じように、伝統的な形式が何世紀にもわたって保存された事情は、<sup>9</sup>日本の場合とは逆に、むしろ新形式の導入を容易にしたようにみえる。中国の場合のように、旧を新に換えようとするときには、歴史的一貫性と文化的自己同一性が脅かされる。旧体系と新体系とは、激しく対決して、一方が敗れなければならない。しかし旧に新を加えるときには、そういう問題がおこらない。今日なお日本社会に著しい極端な保守性(天皇制、神道の儀式、美的趣味、仲間意識など)と極端な新しいもの好き(新しい技術の採用、耐久消費財の新型、外来語を主とする新語の濫造<sup>らんぞう</sup>など)とは、おそらく楯<sup>たて</sup>の両面であつて、<sup>10</sup>同じ日本文化の発展の型を反映しているのである。

(加藤周一「日本文学史序説 上」)

〔注〕法然…一一三三～一二二二。浄土宗の開祖。

道元…一二〇〇～一二五三。曹洞宗の開祖。

仁斎…伊藤仁斎。一六二七～一七〇五。儒学者。

徂徠…荻生徂徠。一六六六～一七二八。儒学者。

声明…仏教儀式に用いられる声楽。

狩野派…室町中期より明治にわたる、日本絵画史上最大の流派。

琳派…尾形光琳によって大成された、江戸時代の絵画の一流派。

伽藍…寺院の建築物。

朱子学：南宋の朱熹が大成した儒学の体系。

旋頭歌：五七七、五七七の形式の歌。

問一 傍線部1について、筆者がこのように考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 鎌倉仏教や儒学は、具体的な文学作品のなかでその思想を表現してきた点において、日本文化の一般性に合致しないから。

b 鎌倉仏教や儒学は、独創的な哲学の体系をつくり出した点において、日本文化の歴史に異彩を放っているから。

c 鎌倉仏教や儒学は、抽象的・理性的であることを究めた点においては、日本文化の一般的法則から外れているから。

d 鎌倉仏教や儒学は、思弁哲学を形成した点においては、日本文化の傾向と異なっているから。

問二 傍線部2について、次の問に答えよ。

(1) 「このような性質」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 日本の文化が、形而下のものから遊離して形而上的なものへ向かったこと。

b 日本の文化が、素材の組合せにより構造的な秩序をつくり出していること。

c 日本の文化が、日常生活の現実と密接に係っていること。

d 日本の文化が、美的に洗練することを目指していること。

(2) 「地中海の古典時代や西欧の中世の文化の性質」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 多声的音楽が器樂的世界をつくり上げていたこと。
- b 抽象的で包括的な哲学が文化の核として君臨していたこと。
- c 絵画や彫刻は大伽藍を包括する役割をしていたこと。
- d 広場を中心として各種の芸術が構成されていたこと。

問三 傍線部3について、「僕とした」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 友人として歓迎した
- b 自身と同列のものに見なした
- c 奴隸として酷使した
- d 召使いのように仕えさせた

問四 傍線部4について、筆者がこのように考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 日本の文学は、世俗的である点にその特質があったため、思想や他の芸術と交渉をもたなかったから。
- b 日本の文学は、日本人の感覚を表現するとともに、思想の主要な表現手段でもあったから。
- c 日本の文学は、仏教に力を貸し、西洋とはくらべものにならないほど美術に影響を与えてきたから。
- d 日本の文学は、仏教の思弁哲学を代弁し、音楽的要素をもつ劇や歌謡まで含んで展開してきたから。

問五 傍線部5について、「表面上の類似」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 日本の文化も中国の文化も、文学が美術や音楽と結びついている点において似ていること。
- b 日本の文化も中国の文化も、裏面では文学と美術・音楽とが別個の発展を遂げていること。
- c 日本の文化も中国の文化も、文学が美術や音楽を代弁している点において似ていること。
- d 日本の文化も中国の文化も、裏面では書を介して文学と美術・音楽が密接につながっていること。

問六 傍線部6は、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 中国では包括的体系への志向が強く、文学も哲学の傾向を帯びてしまうということ。
- b 中国は文学の国であったので、文学が絵画を包括したように哲学をも包括したということ。
- c 中国では形而上学的世界観が文化の中心になっていたため、文学が哲学に吸収されたということ。
- d 中国は普遍的な原理から出発して具体へ到る文化をもつ国なので、文学が哲学に還元されるということ。

問七 傍線部7について、「著しい特徴」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 古い時代から現代に至るまで、同じ言語によって持続的に文学が書かれたこと。
- b 文学と絵画が、書という芸術を介して密接不可分に融合していること。
- c 前に存在した文学の表現形式に、新しい表現形式がつけ加えられること。
- d 短歌は日本の抒情詩の中心的存在であり、今も続いているということ。



問八 傍線部8について、「ものあはれ」を『源氏物語』の本質と見定めた人物を、次の中から一人選べ。

- a 賀茂真淵      b 林羅山      c 松尾芭蕉      d 本居宣長      e 契沖

問九 傍線部9について、「中国の場合」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 旧を新に換えるとき、旧が新の導入に寛大で容易になるよう働きかけること。  
b 旧を新に換えるとき、旧と新が対立して一方が敗れるまで決着がつかないこと。  
c 旧を新に換えるとき、両者が摩擦を起こしつつも文化的自己同一性が重んじられること。  
d 旧を新に換えるとき、伝統的な形式の保存に注意が払われること。

問十 傍線部10について、「同じ日本文化の発展の型」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 歴史的に一貫性のもとに文化を統一のあるものにしてゆくこと。  
b 伝統的な形式と新形式を対決させることによって文化を更新してゆくこと。  
c 古いものを失わないかたちで存続させ、新しいものを順次導入してゆくこと。  
d 保守性を重んじて新しいもの好きの一過性を抑制してゆくこと。

二

次の文章は『源氏物語』の一節である。夕霧(冠者の君・男君)と幼なじみでいこの雲居雁は、ともに恋心を抱くようになるが、雲居雁の父内大臣に知られて仲を引き裂かれる。雲居雁は祖母大宮のもとに住んでいたが、内大臣邸に引き取られることになった。当日、夕霧は大宮邸を訪れる。これを読んで後の問に答えよ。

冠者の君、物のうしろに入りみて見たまふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おし拭ひつ  
つおはするけしきを、御乳母いと心苦しう見て、宮にとかく聞こえたばかりて、夕まぐれの人のまよひに对面せさせたまへ  
り。

かたみにもの恥づかしく胸つぶれて、ものも言はで泣きたまふ。「大臣の御心のいとつらければ、さはれ、思ひやみなんと  
思へど、恋しうおはせむこそわりなかるべけれ。なめて、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よそに隔てつらむ」とのたまふ  
さまも、いと若うあはれげなれば、「まろも、さこそはあらめ」とのたまふ。「恋しとは思しなんや」とのたまへば、すこしうな  
づきたまふさまも幼げなり。

御殿油まゐり、殿まかでたまふけはひ、こちたく追ひのしる御前駆の声に、人々、「そそや」など怖ち騒げば、いと恐ろし  
と思してわななきたまふ。さも騒がればと、ひたぶる心に、ゆるしきこえたまはず。御乳母参りてもとめたてまつるに、気色  
を見て、「あな心づきなや。げに、宮知らせたまはぬことにはあらざりけり」と思ふにいとつらく、「いでや、うかりける世か  
な。殿の思しのたまふことはさらにも聞こえず、大納言殿にもいかに聞かせたまはん。めでたくとも、もののはじめの六位宿  
世よ」とつぶやくもほの聞こゆ。ただこの屏風のうしろに尋ね来て嘆くなりけり。男君、我をば位なしとはしたなむるなり  
けりと思すに、世の中恨めしければ、あはれもすこしさむる心地してめざまし。「かれ聞きたまへ、

7  
くれなるの涙にふかき袖の色をあさみどりと言ひしをるべき

恥づかし」とのたまへば、

8  
いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ

とものたまひはてぬに、殿入りたまへば、わりなくて渡りたまひぬ。

〔注〕○冠者の君…光源氏の子、夕霧。元服したばかりなのでこのように呼ぶ。この時十二歳。○宮…大宮。○大臣…内大

臣(本文中の「殿」も同じ)。○大納言殿…雲居雁の継父。○あさみどり…六位の人が着る袍ほろの色。

問一 傍線部1「人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 人に見咎められるのも、二人の関係が良好であればあるほどつらく感じたが、今となっては心細さで人に見咎められてもかまわないということ。

b 人に見咎められるのも、二人の仲があまりうまくいっていない時はつらかったが、別れを控え心を通わせた今はひたすら心細いということ。

c 人に見咎められてつらいと思うのは雲居雁と逢うあてのある普通の時の話で、もう逢えないとなると心細くてたまらないということ。

d 人に見咎められてつらさを感じるのはまだ夕霧が幼くて人々に許されていた時の話で、元服した今は心細さしか感じないということ。

問二 傍線部2「かたみに」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 別れの記念に
- b おたがいに
- c 緊張して
- d 遠慮して

問三 波線部ア～エの敬意の対象としてもっとも適切なものを次の中からそれぞれ一つ選べ。(重複選択可)

- a 夕霧
- b 雲居雁
- c 内大臣
- d 大宮

問四 傍線部3「隙」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 心の余裕
- b 心の隔て
- c 逢う時間
- d 逢う機会

問五 傍線部4「騒がれば」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 騒がれるので、もうどうしようもない。
- b 騒がれるなら、それはそれでかまいはしない。
- c 騒ぎなざるので、このまま手放すことはできない。
- d 騒ぎなさざるなら、どうしたらいいのか。

問六 傍線部5「宮知らせたまはぬことにはあらざりけり」とあるが、雲居雁の乳母は何がわかったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 大宮に二人の仲を知らせるべきであったということ。
- b 大宮に二人の仲を知らせてはいけなかったということ。
- c 大宮は二人の仲を知っていたということ。
- d 大宮は二人の仲を知らなかったということ。

問七 傍線部6「もののはじめの六位宿世よ」からわかる雲居雁の乳母の心情としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 六位という低い身分から順々に出世していかなければならない夕霧に同情する気持ち。
- b 元服したばかりなので六位でも仕方がないとあきらめる気持ち。
- c 光源氏の子なのに六位にしかなれなかった夕霧をあざける気持ち。
- d 雲居雁の結婚相手が六位という低い身分であることが許せない気持ち。

問八 傍線部7の和歌の説明として適切でないものを次の中から一つ選べ。

- a 「くれなるの涙」は、雲居雁を思つて流す血の涙のことである。
- b 「あさみどり」色は「くれなる」色にまさっていると詠んでいる。
- c 乳母に対する反発の気持ちが含まれている。
- d 雲居雁に同意を求める歌である。

問九 傍線部8の和歌の説明として適切でないものを次の中から一つ選べ。

- a 我が身の悲運と先の見えない二人の仲を嘆いている。
- b 「いろいろな」は、夕霧の歌の「くれなゐ」「あさみどり」に応じたものである。
- c 「いろいろ」、「うき」、「染め」、「中の衣」は縁語である。
- d 「中の衣」は男女の仲も意味している。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、登場人物の商生と楊采采はいとこの関係であり、隣り合った邸宅に住んでいるという設定になっている。設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

商氏<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>商生之祖姑也。每<sup>ニ</sup>読書之暇、与<sup>ニ</sup>采采共<sup>ニ</sup>戯<sup>レ</sup>於<sup>ニ</sup>庭<sup>ニ</sup>、為<sup>ニ</sup>商氏

所鍾愛。嘗<sup>テ</sup>撫<sup>シテ</sup>生指<sup>シテ</sup>采采<sup>ヲ</sup>謂<sup>ヒテ</sup>曰<sup>ハク</sup>、汝宜益加進脩、吾孫女誓<sup>ヒテ</sup>不<sup>レ</sup>適<sup>カシメ</sup>他

族<sup>ニ</sup>。当<sup>レ</sup>令<sup>下</sup>事<sup>レ</sup>汝以<sup>テ</sup>統<sup>ニ</sup>二姓之親<sup>ニ</sup>、永以為<sup>レ</sup>好也。女父母樂<sup>ニ</sup>聞<sup>シ</sup>此言<sup>ヲ</sup>、

即<sup>チ</sup>欲<sup>ス</sup>歸<sup>ル</sup>之。而生<sup>ル</sup>嚴親以<sup>テ</sup>生<sup>ル</sup>年幼<sup>ニ</sup>、恐<sup>レ</sup>其怠<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>学業<sup>ヲ</sup>、請<sup>フ</sup>俟<sup>ニ</sup>他日<sup>ヲ</sup>。生

女因<sup>リテ</sup>商氏之言<sup>ニ</sup>、倍<sup>ますます</sup>相憐愛<sup>スルコト</sup>。数<sup>ナリ</sup>歲遇<sup>ヒ</sup>中秋月夕<sup>ニ</sup>、家人会<sup>シテ</sup>飲<sup>ン</sup>沾<sup>ス</sup>醉。

遂<sup>ニ</sup>同遊<sup>ジク</sup>於<sup>ニ</sup>生宅秋香亭上<sup>ニ</sup>。有<sup>リ</sup>二桂樹<sup>ニ</sup>、垂<sup>レテ</sup>蔭<sup>カゲ</sup>婆娑<sup>ニ</sup>、花方盛開<sup>ク</sup>。月色

团团、香氣濃馥<sup>じようふくタリ</sup>。生女私<sup>ト</sup>於<sup>ニ</sup>其下<sup>ニ</sup>語<sup>ル</sup>心焉。是後女年稍長<sup>ジ</sup>、不復過<sup>ス</sup>

宅。每<sup>ニ</sup>歲節伏臘<sup>ニ</sup>、僅<sup>カニ</sup>以<sup>テ</sup>二兄<sup>ニ</sup>妹<sup>ノ</sup>礼<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>中堂<sup>ニ</sup>而已。閨閣深邃<sup>すいニシテ</sup>、莫<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>致<sup>ス</sup>

其情<sup>ヲ</sup>。後一歲亭前桂花始開<sup>ク</sup>。女以<sup>テ</sup>折<sup>ル</sup>花<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>名<sup>ト</sup>、以<sup>テ</sup>碧瑤牋<sup>せんヲ</sup>書<sup>シテ</sup>絶句一

首<sup>ヲ</sup>、令<sup>メ</sup>侍婢<sup>ヲシテシテ</sup>持<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>授<sup>ケ</sup>生<sup>ニ</sup>、嘱<sup>ル</sup>生<sup>ニ</sup>繼<sup>リ</sup>和<sup>ス</sup>。詩<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>、

秋香亭上桂花芳<sup>シ</sup>幾<sup>カ</sup>度風吹<sup>キテ</sup>到<sup>ル</sup>繡房<sup>ニ</sup>

自<sup>レ</sup>恨<sup>ム</sup>人生不如樹<sup>ノ</sup>朝朝腸斷屋西墻<sup>ノ</sup>

生<sup>レ</sup>得<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>驚喜<sup>ス</sup>。遂<sup>ニ</sup>口<sup>ヲ</sup>占<sup>シ</sup>一首<sup>ヲ</sup>、書<sup>シテ</sup>以<sup>テ</sup>奉<sup>シ</sup>答<sup>シテ</sup>付<sup>レ</sup>婢<sup>ニ</sup>持<sup>チ</sup>去<sup>ラシム</sup>。詩<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>、

深盟密約兩情勞<sup>ス</sup>猶<sup>ヨ</sup>有余香在旧袍<sup>ノ</sup>

記得<sup>ス</sup>去年携<sup>ヘシ</sup>手<sup>ヲ</sup>処<sup>ヲ</sup>秋香亭上月輪

X

(瞿佐「秋香亭記」)

〔注〕○祖姑…祖父の姉妹。 ○沾醉…酔いつぶれる。 ○婆婆…木が生い茂るさま。 ○穠馥…香りが濃厚であるさま。

ま。 ○歳節伏臘…季節ごとの祭日。 ○碧瑤牋…美しい模様の入った緑色の便箋。 ○繡房…美しい飾りのある

部屋。 ○屋西墻…家の西側にある壁あたり。 ○口占…その場で詩を作る。



問一 傍線部1「為商氏所鍾愛」と同じ内容を表す文章として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 見鍾愛於商氏
- b 使商氏鍾愛
- c 莫不鍾愛商氏
- d 不必鍾愛商氏

問二 傍線部2「汝宜益加進脩」、3「二姓之親」、4「即欲歸之」の意味として、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

- 2 a おまえはもつと積極的にならなければならない
  - b おまえはどんどん話を進めた方がよい
  - c おまえは今以上に経済力をつけねばならない
  - d おまえはさらに学問にはげむがよい
- 3 a 二人の両親の縁
  - b 二つの一族の絆
  - c 二つの姓名の近似
  - d 二人の共通の親類

4 a 意外にも帰りがかった

b すぐさま嫁がせたいと思った

c やつと結論に至った

d そして合意に至るところだった

問三 傍線部5「不復過宅」について、そうなった理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 好意を寄せる相手に、その姿すら見せるのは気恥ずかしかったから。

b 相手の家の前を通り過ぎると、その家族にとがめられると考えたから。

c 年頃になって、お互いに顔を合わせることに気遣いが必要になったから。

d 女性の身で男性の家を訪ねることは、世間的にはしたくないと思われるから。

問四 傍線部6「囑生継和」とは、具体的にどうすることをいうのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 商生に対して、自分の詩の内容を引き継ぐような詩を作って欲しいと求めた。

b 商生に対して、自分の詩に足りない内容を補うような詩を作るように求めた。

c 商生に対して、自分の詩と同じ形式の七言絶句を作ってくれるよう求めた。

d 商生に対して、自分の詩の内容と照応するような詩を作ってくれるよう求めた。

問五 傍線部7「自恨人生不如樹」と詠ずる理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 桂の木の一生は、束縛の多い人間の一生と比べてはるかに勝っていると感じたから。
- b 桂の花は美しいけれどもはかなく、人間の長い人生には及ばないと思ったから。
- c 桂の木は、花の香を何処にでもかおらせて、その存在を人に示すことができるから。
- d 桂の木は二本並んで立っており、その寄り添う姿はまるで恋人のようだと思ったから。

問六 傍線部8「腸断」の解釈として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 会えないので、ひじょうに哀しい。
- b 回顧の念で、胸がいつぱいである。
- c 朝を一人で迎えることが口惜しい。
- d 妬ましい思いで一晩中寝られない。

問七 傍線部9「猶有余香在旧袍」の解釈として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 昨年かいた桂の花の残り香が今もなお私の中にあり、贈られた桂の花で鮮明にそれを思い返した。
- b 昨年の密会の思い出が花の香とともに衣服に残り香としてのこっていて、昨年のことが思慕される。
- c 古い衣服には貴女の香が残っており、それが今届いた桂の花によって自然と思い返された。
- d 花の残り香と古い衣服とが一緒になって、昨年の密やかな出会いが懐かしく思い出される。

問八 文中の空欄Xに補充する語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 鮮
- b 円
- c 明
- d 高

